

山梨県北巨摩郡武川村

# 宮間田遺跡

県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報

1986

武川村教育委員会  
峡北土地改良事務所

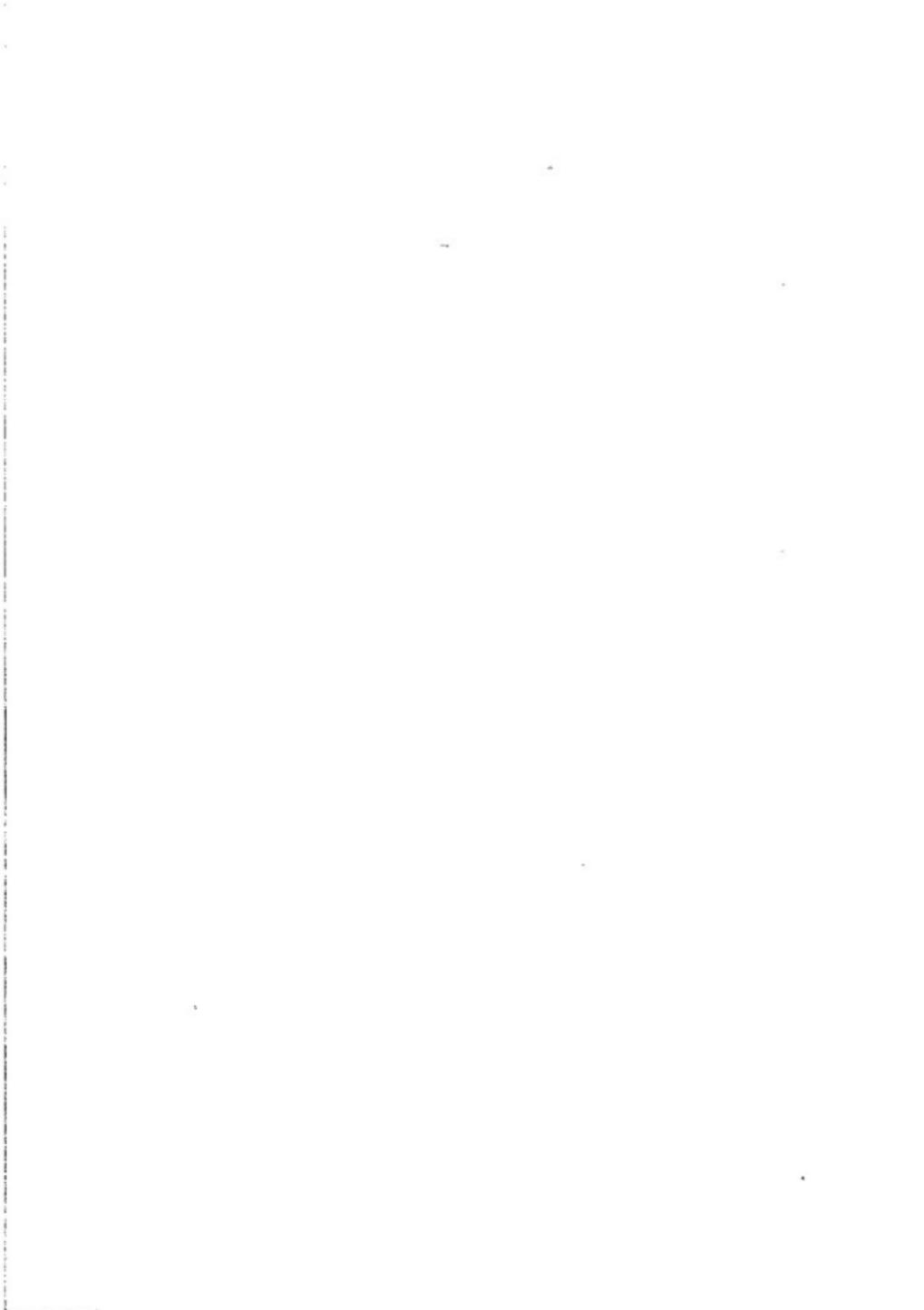
山梨県北巨摩郡武川村

# 宮間田遺跡

県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報

1986

武川村教育委員会  
峡北土地改良事務所



## — 村内最大級のムラのあとを発見！ —

ほくつちょうさ  
昨年の夏、村内下三吹の発掘調査で今からおよそ1000年前の大きなムラのあとが発見されました。今から1000年前といふとどんな時代であったか皆さんご存知ですか？そうです、今から1000年前は平安時代といふ時代でした。「源氏物語」で代表される平安貴族が、王朝絵巻を繰りひろげた時代でありました。しかしそれは都に住む（現在の京都です）一部の人たちのお話で、地方に住んでいた一般の人たちは、税金を納めるために毎日毎日一生懸命働いていました。

むかわせら  
平安時代の武川村は、良い馬を飼育できることで大変有名でした。牧場でたくさんの馬を育てて、毎年その中から特にすぐれた馬を30匹、皇室に献上していました。皇室専用の牧場は御牧とよばれて関東地方に集中してありました。東京（武藏）・群馬（上野）・長野（信濃）そして山梨（甲斐）の4つの国に御牧が置かれています。山梨には現在の韮崎市・高根町・武川村の3箇所に御牧がありました。武川村の御牧は「真衣野牧」とよばれています。現在の牧原地区は、牧場に関する地名の名残りではないかといわれています。牧場そのものは現在の柳沢地区を中心にあったと思われますが、大武川の水害や工事等によりその証拠は残っていません。

## — 宮間田ムラは牧場で働く人々のムラだったのか —

みやまだ  
この問題は大変難しい問題です。なぜならこれを証明できる遺物（土器や石器・鉄器等のことを含めていいます）が、遺跡（ムラのあとやお墓のあとを含めていいます）からみつかっていないからです。しかし宮間田ムラは牧場のあった時代とほぼ同じぐらいの時代のムラであり、なおかつ牧場の近くにあるムラであることから、何か関係があるのではないかと専門家の間でも話題となっています。

## — 宮間田ムラのイエはどんなイエ？ —

みやまだ  
宮間田ムラのイエはどんなイエだったのでしょうか。遺跡を見学なさった方は、大小いくつもの穴ボコがあるだけで、当時のムラの姿を思い浮かべるにはちょっと大変だったと思います。実はあの四角い穴ボコがイエのあとで、堅穴式住居といいます。堅穴式住居は地面を掘りくぼめ、そこに柱や壁になる木材を立てて、その上に屋根をつくりました。イエの中には今のガスコンロの役目をはたすべつつい「カマド」があり、そこで煮炊きをしていました。今でも古くからのお宅を訪ずると、土間に粘土や土を固めてつくられたカマドをみることができますね。又、掘立柱建物とよばれる円形や梢円形の柱の穴だけを残した建物のあとが22棟みつかりました。これは高床式・平地式のイエ又は倉庫のあとと思われますが、いったいどれがイエで、どれが倉庫であるかはっきりわかりません。どのような形をした建物が建っていたかもはっきりわかりませんが、おそらく付図第1図のような建物が建っていたのではないかと思われます。

す。

宮間田ムラからはたくさんの堅穴式住居址35軒、掘立柱建物址22棟、その他たくさんの土器等がみつかりました。平安時代にここに暮らした人々は、今の私たちとはまったくの無関係ではありません。現在と変わらぬ風景をながめ、毎日一生懸命暮らしていたのです。この武川で培われた生活の知恵は、知らず知らずのうちに私たちの生活の中に溶けこんで、今日の生活中に生きされていると思います。私たちの心の中にあるふるさとの風景は、いつの時代にも人の心の中に残り、どこの土地へ行ってもその風景は消えることなく生きつづけています。宮間田遺跡の発見は、こうしたふるさとの土地と深くかかわりながら生きた私たちの祖先の生活を考えなおし、現在の生活に結び付ける良い機会を与えてくれたと思います。



付図第1図

堅穴式住居址と掘立柱  
建物址の復元想像図  
(史蹟説明「古代の村」古  
代日本を発掘する 6 岩波  
書店1985より転載)

## 序 文

武川村は山梨県の西北部、南アルプスの麓に位置し、この山麓と大武川、小武川、釜無川の氾濫原に発達した村です。昭和60年度県営圃場整備事業に伴い、三吹宮間田地区に平安時代の土器片などの遺物が表層に散見していたため、昭和60年7月末から11月末にかけて発掘調査を実施いたしました。

この地帯は古代において、天皇へ献上する馬を飼育していた牧場があった土地がありました。発掘調査の結果、縄文時代・平安時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が発見されました。中でも、漁撈具である土錐を多数出土した住居址が発見されましたことは、山間の地における当時の生活を解明する貴重な資料を得られたことになり、意義深いものがあります。

この発掘調査で得られた資料は、今後歴史資料として広く活用していく所存あります。なお発掘調査にあたり、県文化課、県北土地改良事務所、直接発掘調査の御指導、御協力をいただいた白州町教育委員会に対し、心より感謝申し上げると共に、炎天下黙々と作業にあたられた地元の皆様に対しまして深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和61年3月31日

武川村教育委員会

教育長 小澤芳武

## 例　　言

1. 本書は武川村下三吹地区県営柵場整備事業に伴う、宮間田遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、事業主体者である狭北土地改良事務所との負担協定により、文化庁・山梨県より補助金を得て、武川村教育委員会が調査主体となり昭和60年7月22日～同年11月29日にかけて実施した。
3. 本書の作成に際し、図面整理、遺物実測、トレス、写真撮影は平野 修が行い、一部、清水能行がこれを補佐した。執筆は第Ⅰ章を清水と平野が分担し、第Ⅱ～V章は平野が行い、編集も平野が行った。
4. 本遺跡の出土遺物・諸記録は、武川村教育委員会が保管している。
5. 施釉陶器については愛知県陶磁資料館学芸員の浅田員由・井上喜久男両氏に御教示を賜り、石器の石質判別については井戸尻考古館の武藤雄六・小林公明・樋口誠司の各諸氏に御教示を賜った。記して感謝する次第である。
6. 発掘調査及び概報作成にあたり次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝する次第である。（順不同、所属・敬称略）  
磯貝正義・末木健・萩原三雄・椎名慎太郎・十菱駿武・田代孝・新津健・坂本美夫・米田明訓・八巻与志夫・長沢宏昌・保坂康夫・中山誠二・数野雅彦・新津重子・中山千恵・山路恭之助・佐野勝広・山下孝司・雨宮正樹・櫛原功一・宮沢公雄・鈴木治彦・寺内隆夫・県文化課・県埋蔵文化財センター・狭北土地改良事務所・山梨県考古学協会・山梨郷土研究会・県立考古博物館
7. 発掘調査組織  
調査主体………武川村教育委員会教育長 小澤芳武  
調査担当………白州町教育委員会埋蔵文化財調査担当 平野 修  
調査補助員………武川村教育委員会社会教育係主事補 清水能行  
調査事務局………中山朝雄（昭和60年12月27日退職）・奥石圭俊・田中あぐり・中山美代子・水石左江子・中山嘉明
8. 発掘調査及び遺物整理参加者（順不同、敬称略）  
武藤きみこ・武藤美枝子・中山広子・中山ヨシ子・中山志げ乃・中山かめ代・中山玉枝・中山すみ可・平田玲子・藤山君江・奥石富美子・奥石泰雄・藤井ちとせ・鈴木佳子・水石喜美子・大沢房子・斎木優美子・舟橋登里・溝口正輔・八代史子

## 凡　　例

1. 住居址実測図中のスクリーントーンは焼土範囲を示している。
2. 遺物実測図中の断面における網目のスクリーントーンは須恵器を、斜めのスクリーントーンは灰陶陶器を示し、内面における網目のスクリーントーンは内面黒色土器を示している。又、フイゴの羽口における網目のスクリーントーンは溶解鉄の付着を示している。
3. 挿図第1図に用いた地図は昭和52年9月、国土地理院発行の5万分の1「八ヶ岳」・「蘿崎」を使用している。
4. 遺構・遺物の縮尺は各挿図中に示している。

## 本文目次

### 序 文

### 例 言・凡 例

### 目 次

I	調査に至る経緯と経過	9
II	遺跡の地理的・歴史的環境	10
III	遺跡の概要	15
IV	遺跡と遺物	15
(1)	竪穴式住居址と出土遺物	15
(2)	掘立柱建物址	32
V	ま と め	33

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	11
第2図	遺跡周辺地形図	13
第3図	遺構配置図	14
第4図	第9、10号住居址	16
第5図	第9号住居址出土遺物	17
第6図	第10号住居址出土遺物	18
第7図	第14号住居址	19
第8図	第14号住居址出土遺物	19
第9図	第18号住居址	20
第10図	第18号住居址出土遺物その1	21
第11図	第18号住居址出土遺物その2	22
第12図	第20号住居址	24
第13図	(A) (B) 第20号住居址出土遺物	25
第14図	第32号住居址	26
第15図	第32号住居址出土遺物その1	27
第16図	第32号住居址出土遺物その2	28
第17図	第33号住居址	29
第18図	第33号住居址鍛冶炉	30
第19図	第33号住居址須恵器出土状態	30
第20図	第33号住居址出土遺物	31
第21図	第11号掘立柱建物址	32

## 圖 版 目 次

## 表 目 次

第1表 第10号住居址出土遺物一覽表	17
第2表 第18号住居址出土遺物一覽表(1)	22
第3表 第18号住居址出土遺物一覽表(2)	23
第4表 第20号住居址出土遺物一覽表(A)	25
第5表 第20号住居址出土鐵器一覽表(B)	26
第6表 第32号住居址出土遺物一覽表	28
第7表 第33号住居址出土遺物一覽表	30

## I 調査に至る経緯と経過

武川村では昭和54年度から圃場整備事業を実施している。圃場整備事業とは、土地改良法等に基づいて行われる「農用地の改良、開発、保全及び集団化」を図る事業の一つで、その目的として、農業生産の基盤の整備及び開発を図り、それにより生産性の向上、農業総生産の増大、農業生産の選択的拡大及び農業構造の改善を図ることにある。

武川村では、村内の農地約 171haを対象として行っており、初年度の牧原地区 7.8haを皮切りに、昭和59年度までに約 119.5ha、全体の約70%が完了している。昭和60年度は新たに柳沢地区約10ha、新奥地区約5ha、下三吹地区約5ha計約20haが工事対象となっている。しかし、下三吹地区内の工事予定区域に平安時代を主体とする土器片が散布していることが県文化課及び武川村教育委員会による現地踏査によって明らかになったため、県文化課、武川村教育委員会、県北土地改良事務所の三者で協議を行った結果、土器片の散布がみられる箇所及びその周辺に関して早急に遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施する必要があるとの結論に達した。

試掘調査は、昭和60年5月14日から17日にかけての三日間にわたり県埋蔵文化財センター・八巻与志夫文化財主事が実施した。東西約 160m、南北約 100mの範囲に試掘坑を任意に設定し遺構確認を行ったところ、平安時代を主体とする土器片等の遺物多数と、堅穴式住居址と思われる黒色土の落ち込みを4箇所確認した。この調査結果を踏まえ再度三者協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施して記録を持って保存に代えることで合意に達した。遺跡名は、小字名より「宮間田遺跡」とし、昭和60年6月14日武川村と県北土地改良事務所との間で埋蔵文化財発掘調査費に関する協定書をとりかわした。

しかし、発掘調査を担当できる人材が武川村内にはおらず、その確保に困難を極め、発掘調査開始が大幅に遅れてしまった。県文化課の調整作業により隣町である白州町教育委員会の埋蔵文化財担当の派遣を依頼することになり、昭和60年7月16日、同町教育委員会・平野 修埋蔵文化財担当の承諾を得ることができた。

発掘調査は、武川村教育委員会が主体となり、昭和60年7月22日より開始し、同日より重機を投入し表土の除去作業を行った。同年7月29日より作業員を投入し、遺構確認面のジョレンによる精査とともに、グリッドを設定する。グリッドは、10mメッシュを基本とし、調査区内に任意の基準杭を設定。調査区全体をカバーし、東から1~8、南からA~Hと命名した。

調査の進展につれ、当初の予想をはるかに越えた数の遺構が発見され、現場作業も多少の遅れが出ていた。更に9月中旬になり、調査区域に隣接する工事現場において重機による表土除去作業中、堅穴式住居址と掘立柱建物址が露出するという事態となり、文化財保護の立場からこの部分に関しても調査を行う必要性があると判断し、調査期間及び調査面積の変更を県北土地改良事務所に対し通知し、昭和60年9月24日協定変更理由書、内容書を提出した。

その後も遺構の発見が相次ぎ、調査期間の延長を余儀なくされた。10月も下旬になり、調査開始時より本遺跡に注目していた県考古学協会・山梨郷土研究会等より遺跡の全容解明に向けて完全調査を望む声が高まり、マスコミ等にも大きく取り上げられた。しかし、調査期間と調査担当者の派遣期間の大幅延長という問題をかかえている村教育委員会としても、これ以上の調査の継続は困難であるとして県文化課及び学会の間で協議を行った。その結果調査は11月末まで継続し、引き続き白州町教育委員会の平野 修埋蔵文化財担当が調査を担当することとなった。さらに県埋蔵文化財センターの文化財主事の協力も得るというかたちで調査は進められ、最終的に調査は11月29日に終了した。

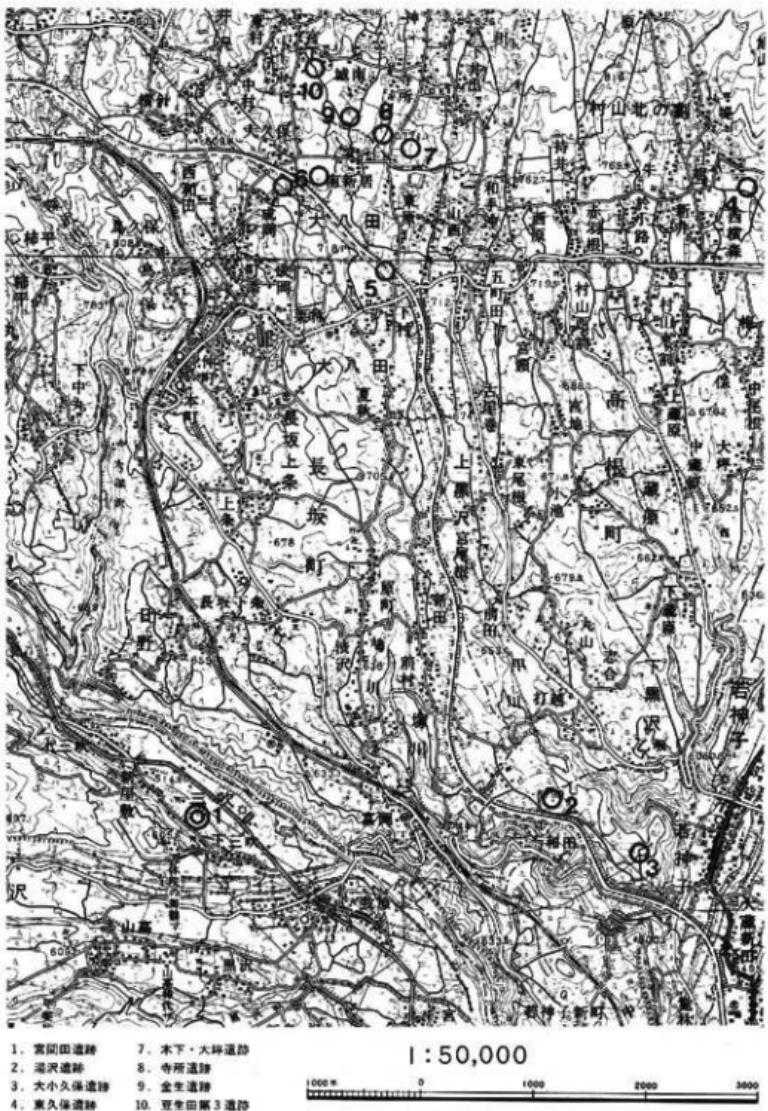
宮間田遺跡の発掘調査は武川村のみならず北巨摩地区全体の文化財保護行政に対しても多くの問題を残したといえよう。廻場整備事業という性格上、発掘調査にかかる以前より様々な制約があり、試掘調査も不十分なまま本調査を行わなければならないという現状もある。今後、文化財保護行政を担う教育委員会としても関係諸機関と充分な協議を行い、これらの諸問題を解決し調査に望まなければならない。

## II 遺跡の地理的・歴史的環境

武川村は、山梨県の北西部にあたり、「荒れ川」でしられる釜無川が東に流れ、大武川が北部に接する白州町との境界に沿って流れている。内河川は武川村牧原地区の北において合流しており、幾たびかの増水や氾濫等により河床の上昇が著しく、一部では現在の生活面と同一レベルになっている箇所もある。又、西には南アルプス山脈の前衛となっている巨摩山地と赤石山地の山々がそびえ立ち、白州町の境界には女性的な風貌を漂わせる中山がある。当該地域は、地質学的にも注目されている地域であり、いわゆるフォッサ・マグナ（人間地帯）の西縁を形成する糸魚川・静岡構造線がほぼ南北に継走している。この南北に継走する大断層とそれに直交する小断層がこの地域の急峻な地形を形成している。

釜無川の侵食作用で形成された通称七里岩台地は、古八ヶ岳火山の火山泥流で、一部は甲盆地を横切り曾根丘陵にまで達している。現在では白州町の国界橋から蓋崎市蓋崎町まで延び、釜無川左岸に沿っての断崖となっている。武川村をはじめとする白州町・蓋崎市一部の釜無川右岸地域は、その地理的条件により幾たびかの水害をうけ、低位の河岸段丘はほとんど流失してしまっている。そのため各集落は高台に移り、現在の集落は、中位段丘上にある。

北巨摩地域は歴史の宝庫ともいいく縄文時代から中世・近世にかけて数多くの遺跡が存在している。縄文時代の遺跡数もさることながら、平安時代の遺跡に關しても同様なことがいえる。これは律令制以降の開発がいかにすごいものであったかを物語っていると思われる。「和名抄」によると、山梨県には4郡31郷の郡郷が設置されていたとされており、その位置比定については多くの研究者が論考を発表している。その多くは地名などの遺称からの比定であり、多少流動的な部分もあるが大きな成果もあがっている。しかし近年坂本美夫氏は、増加してい



第1図 遺跡の位置

る発掘調査の成果を踏まえて、考古学的見地からも積極的に検討を加えている。

(註1)

現在の武川村は、巨摩郡の真衣郷の中に含まれており、さらに白州町、蘿崎市の一部も含まれている。巨摩郡は「甲斐国志」の記載にもあるように、馬の産地として有名で、「延喜式」によれば甲斐国内に柏前、真衣野、穂坂の三つの御牧（勅旨牧）を置き、毎年60疋の馬を朝廷に献進していたという。この行事を駒牽の儀といつて9世紀から11世紀にかけて行われていた。律令制の衰退と共に駒牽の儀も行われなくなり、1042年の真衣野駒牽の儀の記事をもって文献には現れなくなる。柏前、真衣野、穂坂の三御牧は、いずれも北巨摩郡下に現在比定されており、柏前牧は高根町念場ヶ原を中心とした地域、真衣野牧は武川村牧原から柳沢を中心とした地域、穂坂牧は蘿崎市穂坂町を中心とした地域とされている。いずれも明確に実証し得るものはないが、その地理的環境が南アルプス、八ヶ岳、茅ヶ岳の山麓斜面で広大な土地であり、牧地には適していたと思われる。

今まで直接牧に関連するような遺構や遺物を出土した遺跡は北巨摩郡下、山梨県下では発見されていないが、北巨摩郡下では圃場整備事業等の開発行為により発掘調査件数も増加し、9世紀から10、11世紀にかけての平安時代の遺跡の発見例も増加している。高根町湯沢遺跡・東久保遺跡(2・4)、須玉町大小久保遺跡(3)、長坂町柳坪遺跡・小和田館跡(5・6)、大泉村木ノ下／大坪遺跡・寺所遺跡・金牛遺跡・豆生田第3遺跡(7・8・9・10)などが挙げられる。この他にも須玉町大豆生田遺跡、小瀬沢町前田遺跡・上平出遺跡、大泉村東姥神B遺跡等がある。特に、高根町湯沢遺跡では柵列と共に掘立柱建物址と竪穴式住居が発見されており、他の遺跡とは異なる様相を示している。建物群の配置等から、牧を統轄する牧監の官衙ではないかと推測することもできるが、現在整理進行中のため推測にとどめておきたい。

宮間田遺跡は釜無川右岸において平安時代の集落様相を捉えることのできる最初の遺跡と言つて過言ではないと思われる。本遺跡が真衣野牧に極めて近い距離にあるということから、本集落址の性格を考える場合、牧の存在を忘れてはなるまい。

註1 板本美夫「甲斐の郡（詳）都制」研究紀要1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター1983

註2 雨宮正樹「高根町湯沢遺跡」山梨考古10号山梨県考古学協会1983

註3 同 「東久保遺跡」高根町教育委員会1984

註4 山路恭之助「大小久保遺跡」須玉町教育委員会1983

註5 末木健也「柳坪遺跡A地区・B地区・頸無遺跡」山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡長坂・明野・若崎地内一山梨県教育委員会1975

註6 同本範「小和田館跡」長坂町教育委員会1985

註7 佐野勝広「木ノ下大坪遺跡」大泉村教育委員会1983

註8 大泉村教育委員会齋原功一氏の御教示を得た。

註9 新津 雄「金牛遺跡」大泉村教育委員会1981

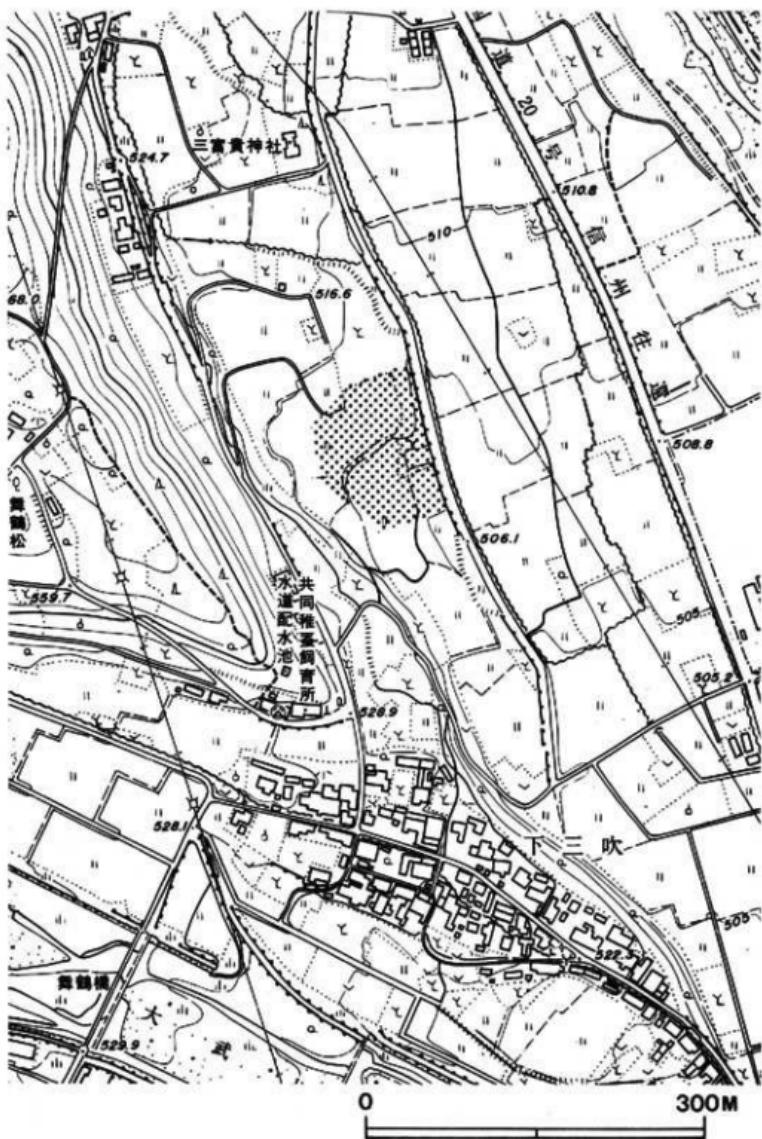
註10 註8に同じ。現在報告書作成中である。

註11 末木健也「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡須玉町地内一」  
山梨県教育委員会1976

註12 佐野勝広「前田遺跡」小瀬沢町教育委員会1986

註13 末木健也「中原遺跡・上平出遺跡」山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡小瀬沢町  
地内一山梨県教育委員会1974

註14 齋原功一「東姥神B遺跡」大泉村教育委員会1985



第2図 遺跡周辺地形 (1/5000)



第3図 宮開田遺跡遺構配図 (1/400)

### III 遺跡の概要

宮間田遺跡は、武川村の北東部、釜無川右岸の河岸段丘上に立地し、標高約513m前後を測っている。行政区画では、山梨県北巨摩郡武川村下三吹字宮間田に属している。遺跡をのせていう段丘は低位段丘にあたり、江戸時代の中頃までは、現在の国道20号線（信州往還）近くまで延びており、現在では釜無川の氾濫のためにその大半が流失してしまった。今回調査対象となった地域は、中山が背後にせまる河岸段丘上で、約4000m<sup>2</sup>を対象としている。現況は、水田・桑畠及び栗の木畠である。

遺跡の基本土層は、第1層耕作土、第2層灰褐色土（水田の床土である）、第3層黒褐色土（砂質で縄文時代から鎌倉時代における遺物包含層である）。しかし本層上面では、遺物がほとんど出土しないため分層できるかもしれないが、色調、含有物など視覚的には変化が認められなかったため1層とした）、第4層黄褐色土（砂質である）、第5層灰褐色砂層である。現表から遺構確認面までの深さは、約45～50cmを測る。遺跡北部は桑畠のため、第4層まで擾乱が著しい。

遺構は、堅穴式住居址35軒（うち鍛冶工房址1軒を含む）、掘立柱建物址22棟、土坑70基以上、方形状ビット、ビット多数が検出された。出土遺物は、平安時代の土師器、須恵器を主体として、灰釉陶器、山茶碗、常滑製陶器片、青磁片、又縄文時代中期～後期の土器片が出土している。石器及びその他の遺物としては、砥石、打製石斧、石鎌、刀子、その他鉄製品、鉄滓、羽口、紡錘車、土鍤等が出土している。

以上のように、宮間田遺跡は平安時代を主体とする集落遺跡であり、9世紀末から営まれている。遺構どうしの重複はあまり認められず、段丘上に散在した状態を呈している。こうした大規模な集落遺跡は釜無川右岸では初めての発見であり、平安時代集落址研究に貴重な資料を提供することとなった。

### IV 遺構と遺物

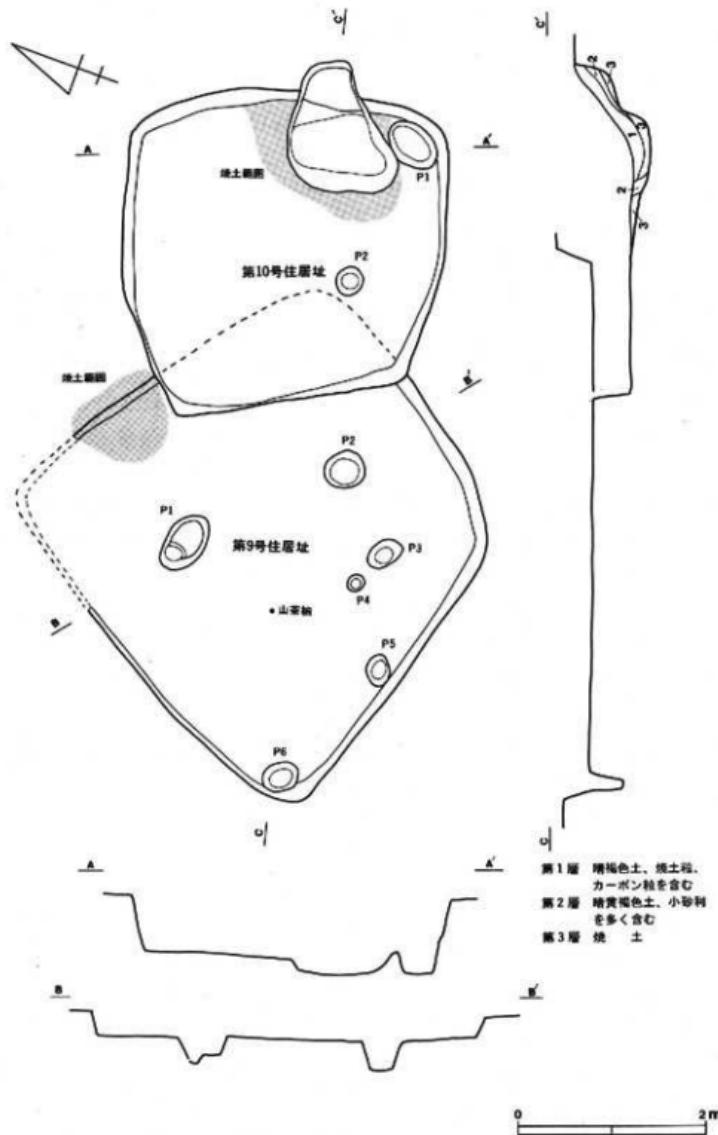
#### (1) 堅穴式住居址と出土遺物

##### 第9号住居址（第4図）

本住居址はD—3グリッドに位置し、第10号住居址と重複している。新旧関係は、本住居址が第10号住居址を貼って構築されているため、本住居址の方が新しい。

規模は長軸4.28m、短軸4.16mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は約30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認されなかった。床面は黄褐色土を床面としており、全体に軟弱である。ビットは6個確認され、いずれも柱穴として考えられるには疑問である。

カマド等の施設は確認されなかったが、東壁付近において床面より約5cm堆積した焼土が認められ、造り付けのカマドに伴うものではないかと考えられたが、それに伴うような施設、遺

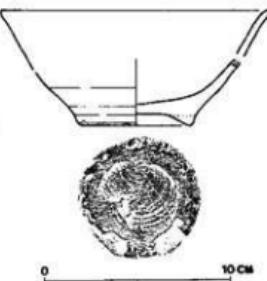


第4図 第9号・10号住居址 (1/60)

物は確認されず、おそらく移動式カマドに伴うものと考えられる。

川土遺物は極めて少ない。土師器の細片が数片と山茶碗の体部から底部にかけての破片を出土している(第5図)。

現高3.5cm、高台径6.2cmを測り、付高台の断面はくずれた三角形を呈する。高台端にモミガラ压痕を残し、底裏には回転糸切痕も残している。胎土は緻密で、色調は乳白色を呈し、生焼けの状態である。時期については、美濃窯の丸石3号窯期に比定でき、13世紀前半代の所産と思われる。第5図



第9号住居址出土土器(1/3)

#### 第10号住居址(第4図)

本住居址はD-3グリッドに位置し、第9号住居址と重複している。新旧関係は先述のとおりで、遺存状態は比較的良好であった。

規模は長軸3.44m、短軸3.34mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は50~60cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は黒褐色土を床としており、カマド周辺部は堅密であるが、あとは概して軟弱である。

カマドは東壁ほぼ中央に位置し、規模は長軸1.3m、短軸1.2mを測り、両袖及び天井部は欠失している。燃焼部は床面を楕円形に20cm程掘下げており、焼土が底面より10cm程の厚さで堆積している。カマド内からは土師器の壊片が数片出土している。

出土遺物(第6図)は床面上約10cmほどのレベルに集中しており、甕類が圧倒的な量を占め、壺類は僅かで、図示できたのは須恵器1点のみである。ほかに出土遺物はない。

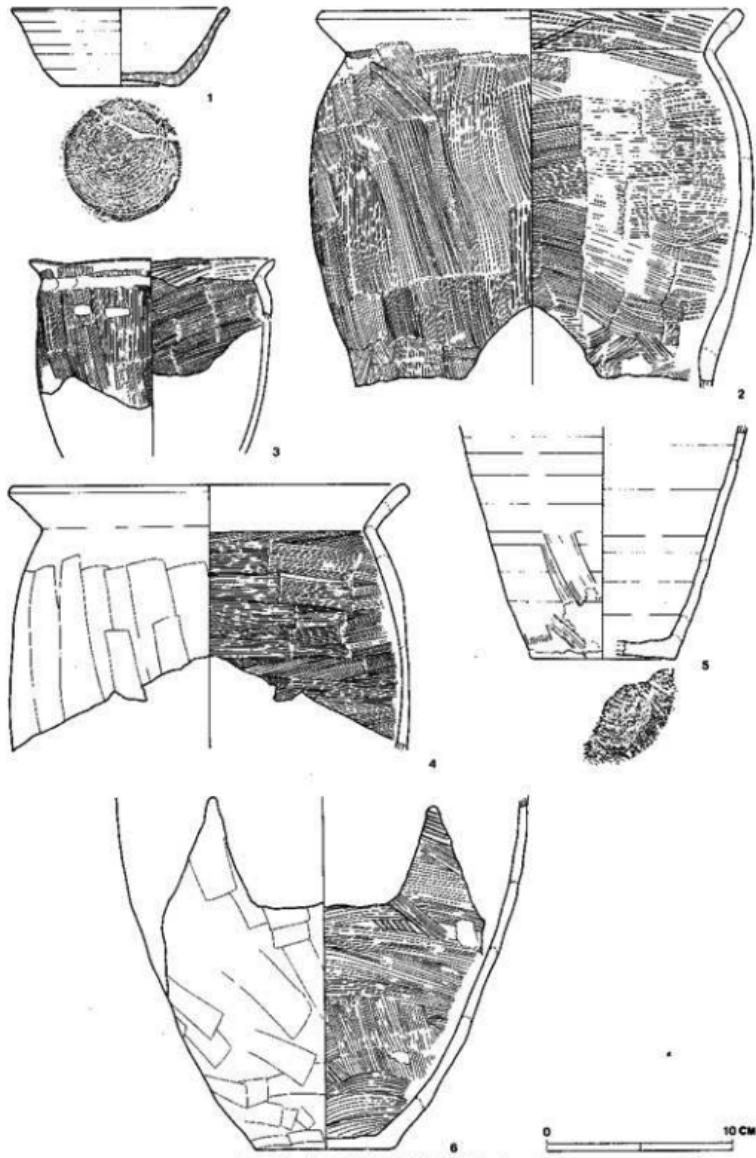
#### 第14号住居址(第7図)

本住居址はF-3グリッドに位置し、土坑2基と重複している。本住居址はいずれの土坑に

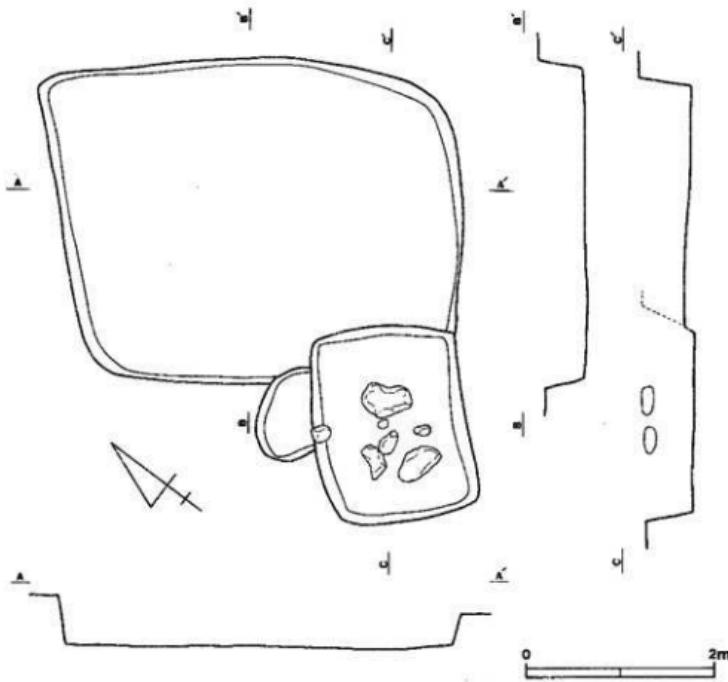
第1表 第10号住居址出土遺物一覧表

法量は上から口径・底径・器高を示す。  
( )は推定である。

番号	器種	残存	法量 cm	調 査	胎上及び燒成	色 調	備 考
1	須恵器 壺	有	(11.5) 6.2 4.1	ロクロ横ナゲ調整 底部に糸切痕残す	白色釉を含む 良 好	黒褐色	
2	土師器 甕	有	(22.4) — 20.0	外表面は堅密のハケ調整 内面は横位のハケ調整	赤色釉、白色釉、雲母 を含む 良 好	赤褐色	
3	土師器 甕	有	13.0 — 10.5	外表面は堅密のハケ調整で あるが、一部横ナゲ調整 内面は横位のハケ調整	白色釉、黑色釉、雲母 を多量に含む 良 好	赤褐色	2次焼成をうけ、器面 は荒れている。
4	土師器 甕	口縁部 破片	(21.2) — 19.1	外表面は割れのハラケズリ 内面は横位のハケ調整	白色釉、赤色釉、雲母 を含む 良 好	外表面 黄色 内面 黑褐色	
5	土師器 甕	底部 破片	— (7.6)	ロクロ横ナゲ調整 底部は1部ハケ調整 底部に糸切痕残す	白色釉、雲母を多量に 含む 良 好	明褐色	
6	土師器 甕	底部 破片	— 7.2 18.5	外表面は割れのハラケズリ 内面は横位及び堅密のハ ケ調整	白色釉、黑色釉、雲母 を多量に含む 良 好	内面は2次 焼成をうけ 黒褐色 内面は褐色	



第6図 第10号住居址出土土器 (1/3)



第7図 第14号住居址 (1 / 60)

も切られているが、遺存状態は良好であった。

規模は長軸 4.3m、短軸 3.4m を測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は 40~50 cm を測り、ほぼ垂直に立ち上

がる。床面は黄褐色土を床としているが、全体に軟弱である。ピット及びカマド等の附属施設は確認されず、焼上等の散布も確認されなかった。

出土遺物は極めて少なく、土師器の細片と常滑製壺の底部破片を出土したのみである。第8図は常滑製壺の底部破片を図示したものであるが、底径 15.6cm、現高 7.6cm を測り、胎土には白色砂粒を多量に含む。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。時期は破片資料のため不明な点が多いが、成形などの状態から14世紀以前の所産と思われる。

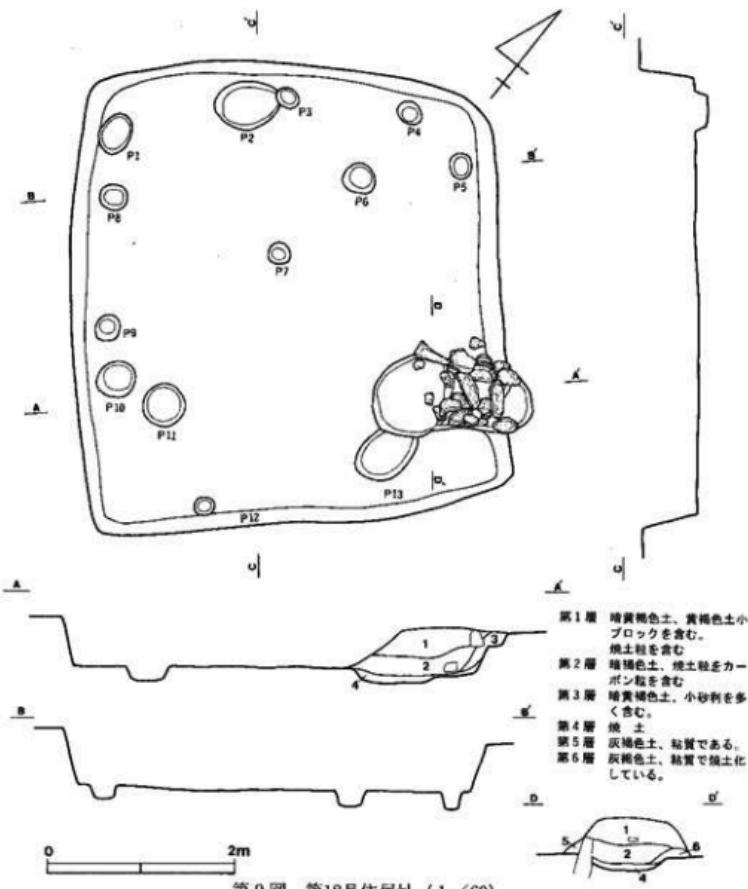
#### 第18号住居址 (第9図)



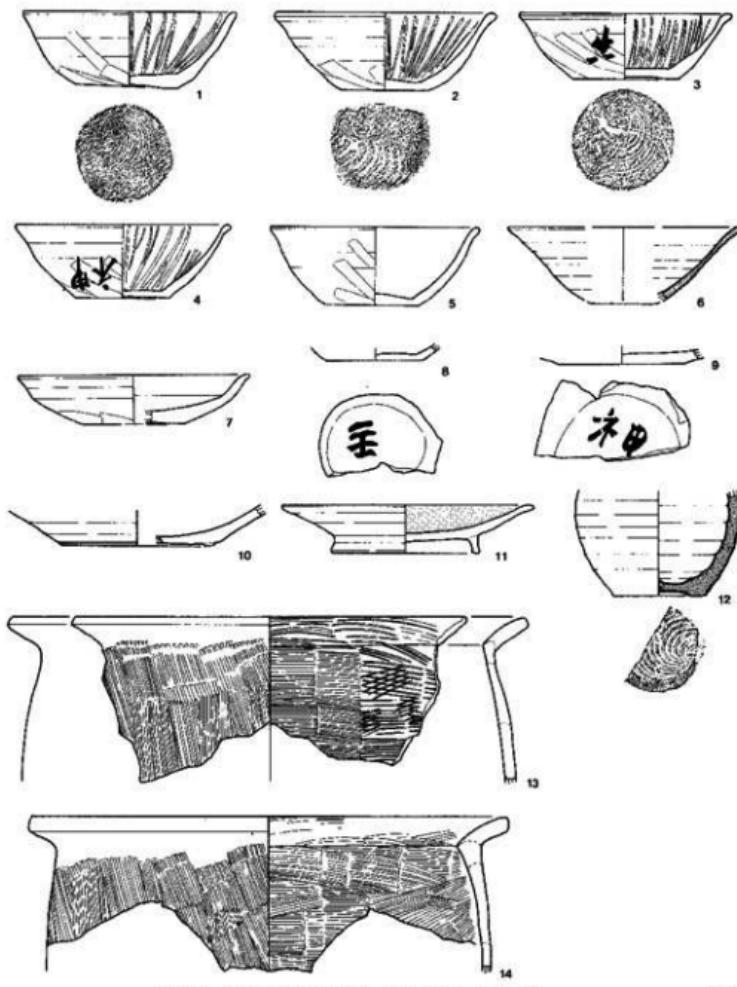
第8図 第14号住居址出土土器 (1 / 3)

本住居址はG—4 グリッドに位置し、他の遺構との重複関係を持たないが、西側に2 mという僅かな距離を隔て第19号住居址が存在する。遺存状態は所々桑の根により擾乱を受けていたが、比較的良好であった。

規模は長軸 4.8m、短軸 4.55m を測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は50~60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黒褐色土を床としており、カマド周辺部は堅緻であるが、あとは概して軟弱である。ピットは13個確認されたが、主に聚際に集中しており、支柱穴的なものと思われる。P 5 からは砥石の欠損品 1 点が出土し、又 P 13 では破片ではあるが遺物が集中して出土しており、貯蔵穴かと思われる。



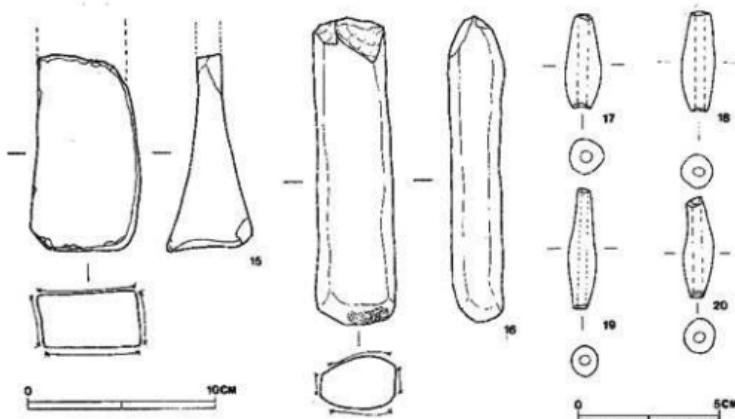
第9図 第18号住居址 (1 / 60)



第10図 第18号住居址出土土器(1) (1 / 3)

カマドは東壁のやや南よりに位置する石組カマドである。遺存状態は良好で、規模は長軸 1.7m、短軸 0.7m を測り、燃焼部は床面より約10cm掘下げて構築されており、天井石に使用されていたと思われる石が、幾つも落ち込んでいる。両袖合せて11個の袖石を残し粘質の灰褐色土を補強材として使用している。焼上は燃焼部の底面より約5~10cmの厚さで堆積している。

出土遺物（第10図・第11図）は土師器の壺・甕・皿・高台付皿、須恵器の壺・甕・小形長頸



第11図 第18号住居址出土遺物(2) (15~16は1/3, 17~20は1/2)

第2表 第18号住居址出土遺物一覧表(1)

番号	器種	残存	法 cm	調 整	胎土及び焼成	色 調	備 考
1	土師器 坏	完形	11.2 5.0 4.0	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ 底部は回転糸切りの後、 1部ヘラケズリ	白色粒、赤色粒を含む 良 好	赤褐色	放振状焼文あり。
2	土師器 坏	完形	11.8 4.2 4.2	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ 底部はヘラケズリ	赤色粒、黒色粒を含む 良 好	④褐色	放振状焼文あり。
3	土師器 坏	完形	11.2 5.5 3.5	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ 底部は回転糸切りの後、 1部ヘラケズリ	赤色粒、雲母を含む 良 好	赤褐色	体部に追記「生」とい う焼文あり。 底部に「火」の字 タマニ付有
4	土師器 坏	%	11.4 4.8 3.9	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ 底部はヘラケズリ	赤色粒、雲母を含む 良 好	明褐色	体部に追記「神」とい う焼文あり。 放振状焼文あり。
5	土師器 坏	%	(11.0) 4.8 4.2	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ 底部は回転糸切りの後、 1部ヘラケズリ	白色粒、赤色粒、雲母 を含む やや不良	④明褐色 ④赤褐色	
6	須恵器 坏	口縁部 破片	(12.0)	ロクロ横ナゲ調整	白色粒を含む	灰褐色	
7	土師器 皿	%	(12.2) (5.3) 2.6	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ	白色粒、雲母を含む 良 好	褐色	
8	土師器 坏	底部破片	6.6	底部はヘラケズリ	赤色粒、黒色粒を含む 良 好	赤褐色	底裏に「上」という墨 書あり。
9	土師器 坏	底部破片	5.2	底部は回転糸切りの後、 1部ヘラケズリ	赤色粒、黒色粒を含む 良 好	赤褐色	底裏に「神」という墨 書あり。
10	土師器 高台付皿	底部破片	6.8	ロクロ横ナゲ調整	赤色粒、白色粒を含む 良 好	赤褐色	
11	土師器 高台付皿	%	(13.3) 7.8 2.5	ロクロ横ナゲ調整	白色粒、赤色粒、雲母 を含む 良 好	褐色	内面黒色処理を施す。

第3表 第18号住居址出土遺物一覧表(2)

番号	器種	性存	法量 cm	倒 壊	動土及び焼成	色調	備 考
12	須恵器 小形長頸瓶	底部破片	4.6 5.6	④クロ横ナメ調整 ⑤リクロ板を削除し残す 底部切削面切り直しを残す	白色砂粒を含む 良 好	灰褐色	
13	土師器 甕	口縁部 破片	(27.6)	倒壊位のハケ調整	白色粒、黒色粒、雲母 を含む 良 好	赤褐色	
14	土師器 甕	口縁部 破片	(25.6)	倒壊位のハケ削除 ⑤傾位のハケ調整	白色粒、黒色粒、雲母 を含む 良 好	赤褐色	
15	砥石	3枚	長10.3 幅5.6 厚4.6	平面は長方形を呈する。4面を使用しており側面及び底面 が荒い。底面した砥粒痕が顕著。明灰色を呈す。		真剣製、往々紙 P 5より出土	
16	砥石?	ほぼ完形	長16.1 幅4.2 厚2.8	裏面は若干丸味をもつ梯状を呈する。4面を使用しており 底面が荒い。又、先端部には敲打痕を残している。		海螺岩製 床面出土	
17	土錐	ほぼ完形	長3.3 幅1.2 孔径0.4		鍛造である 良 好	褐色	床面出土
18	土錐	ほぼ完形	長3.5 幅1.2 孔径0.4		白色粒を含む 良 好	暗褐色	
19	土錐	完形	長4.2 幅1.0 孔径0.4		白色粒を含む 良 好	赤褐色	
20	土錐	完形	長3.5 幅1.0 孔径0.4		鍛造である 良 好	褐色	

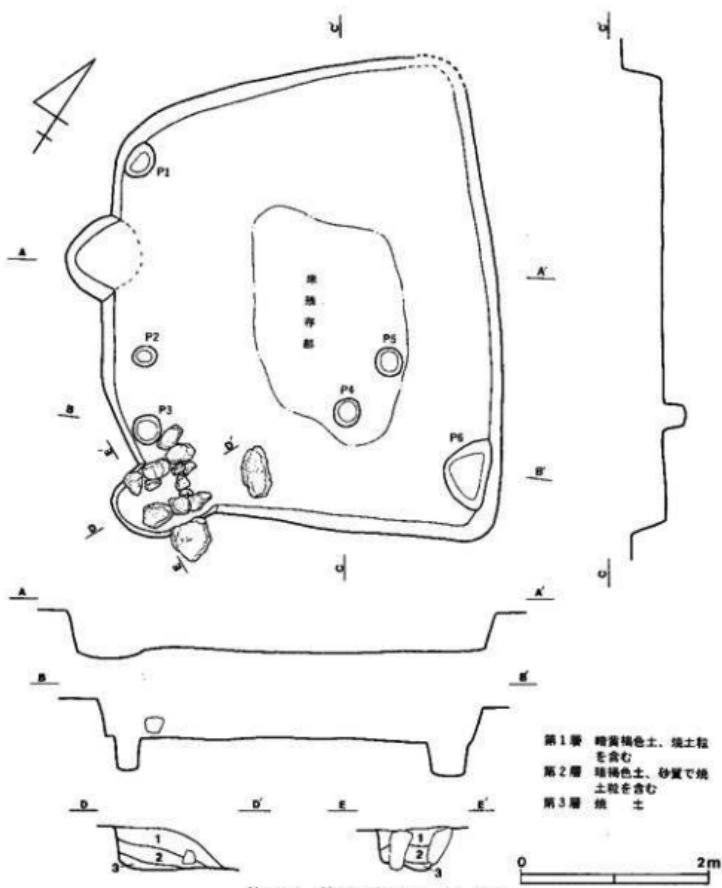
瓶、土錐、砥石等があるが、灰釉陶器の伴出は認められなかった。土師器の壺は、いわゆる「甲斐型」の壺で、11の高台付皿は内面黑色処理を施し、胎土、成形の状態から信州方面からの搬入品と思われる。土錐はほぼ床面直上で3点出土し、覆土内出土のものを合わせると計11点出土している。

#### 第20号住居址(第12図)

本住居址はG-2グリッドに位置し、南側には第18号掘立柱建物址が隣接している。遺存状態は全体に桑の根により擾乱を受けており、あまり良好とは言えない。西壁部分を土坑に一部切られている。規模は長軸 5.1m、短軸 4.3mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。壁高は約40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は擾乱にため検出が困難であったが、精査の結果、本住居址中央において黒褐色土を床とした一部を検出した。しかしあまり堅緻ではない。ピットは6個確認されたが、その配置等には規則性はなく、いずれも柱穴としては捉え難い。P 6からは有茎雁式鉄鎌1点が出土している。

カマドは南壁コーナーに位置する石組カマドである。遺存状態は比較的良好で、規模は長軸 1.0m、短軸 0.8mを測り、両袖合わせて6個の袖石を残している。燃焼部には底面から約10cmの厚さで焼土が堆積しており、底面と床面のレベルはほぼ同一である。

出土遺物(第13図A・B)は少なく、図示できるものも極僅かである。しかし本住居址は他の住居址に比べ鉄製品出土の割合が高く、鉄鎌2点、刀子2点、用途不明鉄製品1点出土している。

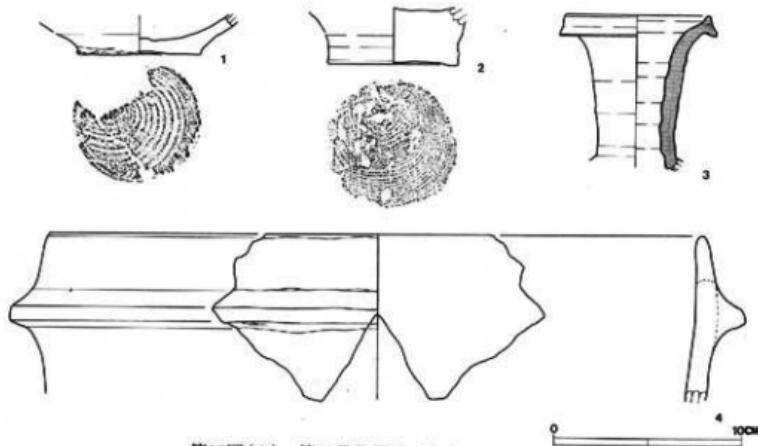


第12図 第20号住居址 (1/60)

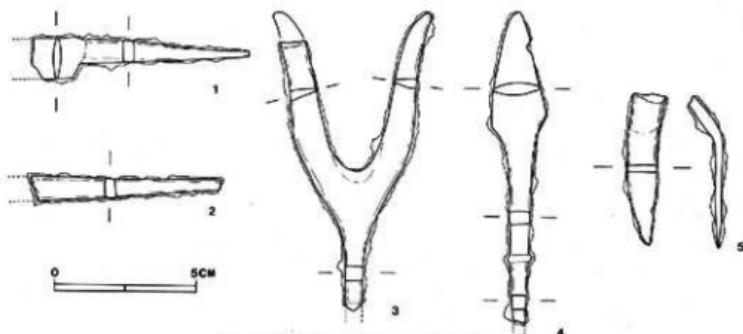
1は刀子で刃部を欠損しており、現長7.6cm、最大幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。2は刀子の  
関節破片で、現長6.7cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmを測る。3は有茎椎式の鉄鏃で、現長10.5cm、  
最大幅3.5cm、厚さ0.5cmを測り、尖頭部は片刃状を呈する。4は有茎尖根の鉄鏃ではほぼ完形  
である。現長11.0cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。5は用途不明の鉄製品で、板状のク  
ギのような形態を呈している。現長5.3cm、最大幅1.1cm、厚さ0.3cmを測る。

#### 第32号住居址（第14図）

本住居址はG-7グリッドに位置し、第11号掘立柱建物址と重複している。新旧関係は第11  
号掘立柱建物址が本住居址の覆土を掘り込んで構築されているので、本住居址の方が古い。本



第13図(A) 第20号住居址出土土器(1 / 3)



第13図(B) 第20号住居址出土鉄製品(1 / 2)

第4表 第20号住居址出土遺物一覧表(A)

番号	器種	残存	法 量 cm	調 整	胎土及び焼成	色 調	備 考
1	土師質 环	底部破片	—	コクロ横ナギ調整 底面に回転糸切痕を残す	白色粒、雲母を多量に含む 良好	暗褐色	
2	土師質 台付环	古部破片	6.8	コクロ横ナギ調整 底面に回転糸切痕を残す	白色粒、赤色粒、雲母を含む 良好	褐色	
3	煮壺器 長柄瓶	口頭部 破片	(7.6)	コクロ横ナギ調整 内面のコクロ痕明瞭	白色粒を含む 良好	暗褐色	
4	土師器 羽釜	口頭部 破片	(34.8)	横ナギ調整	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母を含む やや良好	褐色	

第5表 第20号住居址出土鉄器一覧表(B)

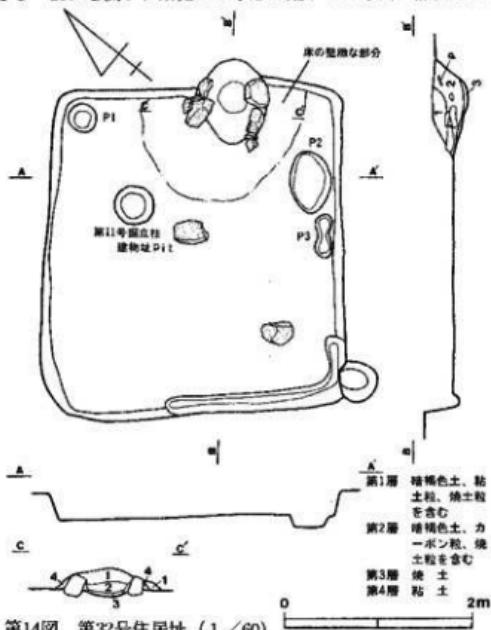
番号	鉄器名	残存	現存計測数値(cm)(g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
1	刀子	刀身欠損	7.6	1.4	0.4	8.65	
2	刀子	闇部破片	6.7	0.9	0.4	7.25	
3	鑿	尖頭部及び茎部一部欠損	10.5	3.5	0.5	26.25	尖頭部は片刃状断面を有する。
4	鑿	ほぼ完形	11.0	1.9	0.5	20.40	
5	不明	口式完形	5.3	1.1	0.3	5.35	

住居址は工事掘削中に発見されたために、遺構上部の約3分の1を削平されてしまった。しかし遺存状態は比較的良好であった。

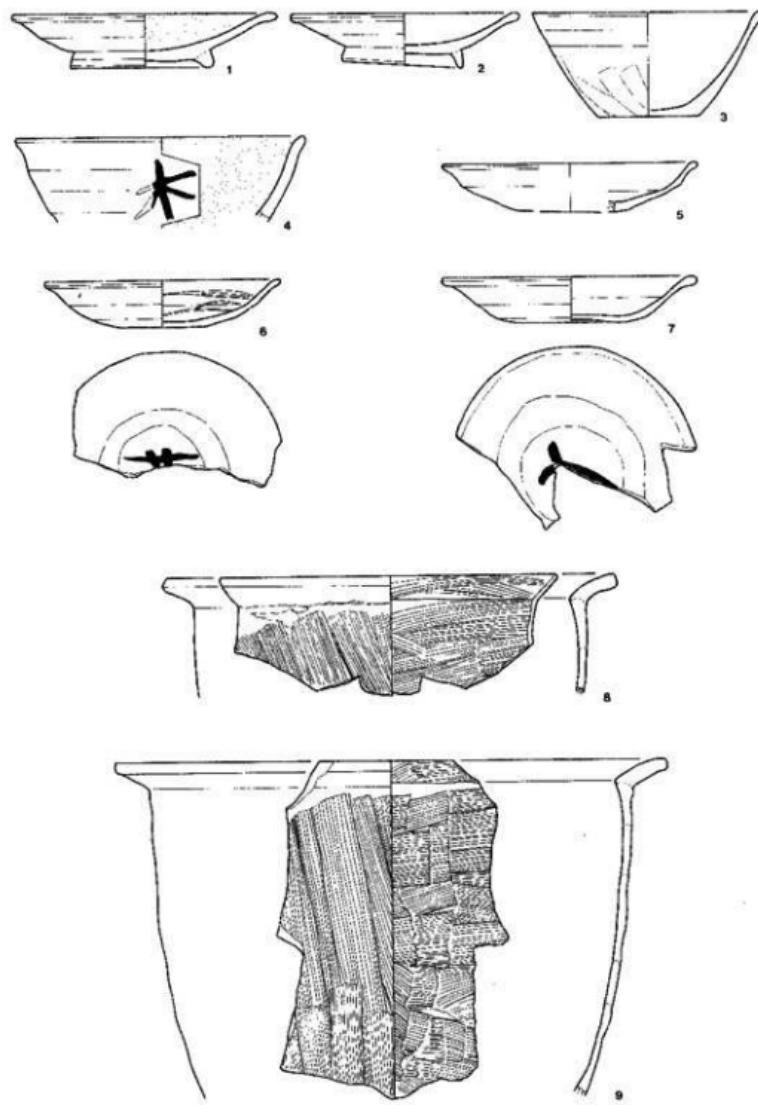
規模は長軸3.5m、短軸3.2mを測り、平面形は開丸方形を呈する。壁高は現存で約30cmを測り、壁の立ち上がりはさほど強くない。壁溝は西壁と南壁の壁下の一部に巡り、幅20cm、深さ8~10cmを測り、断面はU字形を呈する。床面は黒褐色土を床としており、カマド周辺部のみ堅硬である。ピットは3個確認されたが、柱穴と思われるものは存在しない。P2からは比較的多くの遺物が出土し、おそらく貯蔵穴であろう。

カマドは東壁のほぼ中央に位置する石組カマドで、遺存状態は良好である。長軸0.9m短軸0.7mを測り、燃焼部は床面を約10cm程掘り込んで構築している。両袖合せ8個の袖石を残し、打製石斧も詰石として転用していた。燃焼部には天井石に使用されていたと思われる石が多数落ち込んでおり、焼上は底面より約5cmの厚さで堆積している。

遺物(第15図・第16図)はカ

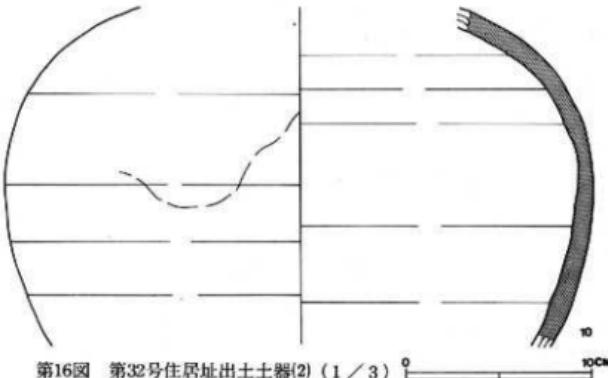


第14図 第32号住居址 (1 / 60)



第15図 第32号住居址出土土器(1) (1 / 3)

マド内及びその周辺部を中心に多数出土しており、土師器壺・甕・皿・高台付皿・灰釉陶器短頸壺破片・鉄滓等が出土している。1・2の高台付皿及び4の壺は内面黒色処理を施し、胎土の状態等

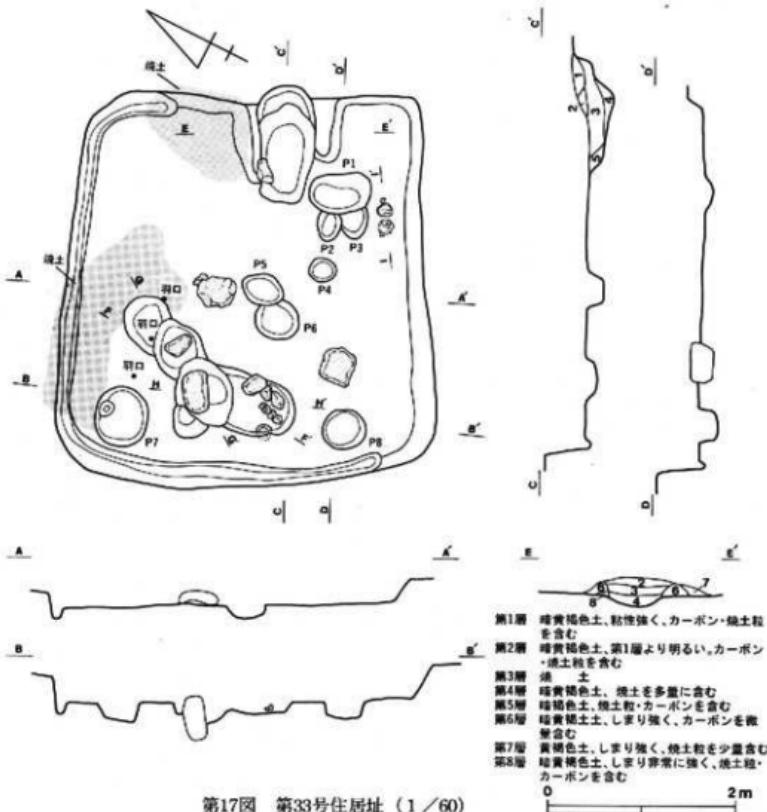


第16図 第32号住居址出土土器(2) (1 / 3)

第6表 第32号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	残存	法量 cm	断面	胎土及び焼成	色調	備考
1	土師器 高台付皿	約	14.0 7.5 2.9	ロクロ横ナゲ調整 底部は条切9の後、1部 ヘラケズリ	白色砂粒、黒色粒、 赤色粒を含む 良 好	褐色	内面黒色処理を施す。
2	土師器 高台付皿	ほぼ完形	11.6 6.3 2.7	ロクロ横ナゲ調整 底部は条切9の後、1部 ヘラケズリ	白色砂粒、黒色粒、 石英を含む 良 好	明褐色	内面黒色処理を施す。
3	土師器 壺	約	(12.2) (5.2) 5.5	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ 底部ヘラケズリ	赤色粒、白色粒を含む 良 好	赤褐色	
4	土師器 壺	口縁部～ 体部	(15.2) _____	ロクロ横ナゲ調整	白色砂粒を含む 良 好	褐色	体間に「木」という墨書あり。 内面黒色処理を施す。
5	土師器 皿	約	(13.4) (5.7) 2.6	ロクロ横ナゲ調整 斜めヘラケズリ	赤色粒、石英を含む 良 好	赤褐色	
6	土師器 皿	約	(12.4) (4.4) 2.7	ロクロ横ナゲ調整 ヘラケズリ	赤色粒、黒色粒を含む 良 好	赤褐色	底裏に墨書きあり。 判読不可。
7	土師器 皿	約	(13.4) (5.6) 2.45	ロクロ横ナゲ調整 ヘラケズリ	赤色粒、黒色粒を含む 良 好	赤褐色	底裏に墨書きあり。 判読不可。
8	土師器 甕	口縁部 底方	(24.2) _____	外面は瓶底のハケ調整 内面は横底のハケ調整	白色砂粒、黒色粒、雲母を多量に含む やや良好	褐色	
9	土師器 甕	口縁部～ 瓶底破片	(29.2) _____	外面は瓶底のハケ調整 内面は横底のハケ調整	白色砂粒、黒色粒、金雲母、石英を含む 良 好	④暗褐色 ⑤赤褐色	
10	灰釉陶器 短頸壺	瓶底-31.2 現高-17.8	ロクロ横ナゲ調整	破壊である 良 好	④深白色 ⑤深褐色 ⑥淡緑色	東濃製 ④深褐色 光・丘1号窯期	

から信州方面からの搬入品と思われる。又、4の体部には「木」と思われる墨書きが認められ、6・7の底部裏においても判読不明であるが墨書きが認められる。第16図は灰釉陶器の短頸壺破片で、釉調は淡緑色を呈し、素地は白灰色で緻密である。产地は素地の状態から東濃地方で、時期は光ヶ丘1号窯期で捉えられる。鉄滓は住居址覆土中より2点しており、いずれも楕円形を呈



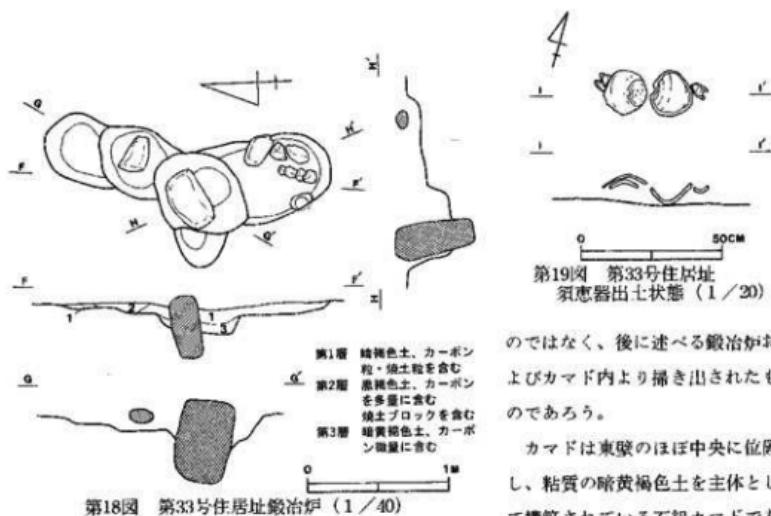
第17図 第33号住居址 (1 / 60)

し、重量は85gと282gである。

#### 第33号住居址 (第17・18・19図)

本住居址はF-8グリッドに位置しており、東側に第12・13号掘立柱建物址が隣接している。重複関係はないが、遺存状態はあまり良好とは言えない。

規模は長軸4.1m、短軸3.8mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は現存で15~35cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は北壁、東壁、西壁の壁下の一部に巡り、幅15~26cm、深さ6~10cmを測り、断面はU字形を呈する。床面は黒褐色土を床としており、住居址中央部及びカマド周辺部を中心に堅緻である。ピットは8個確認されており、その中のP1の底面は熱を受け赤褐色化している。又、焼土が北壁、東壁の一部にかかるように堆積しており、その厚さは床面上5~15cmを測っている。さらに炭化材も多く含まれていたが、火災に伴うも



第18図 第33号住居址鍛冶炉 (1/40)

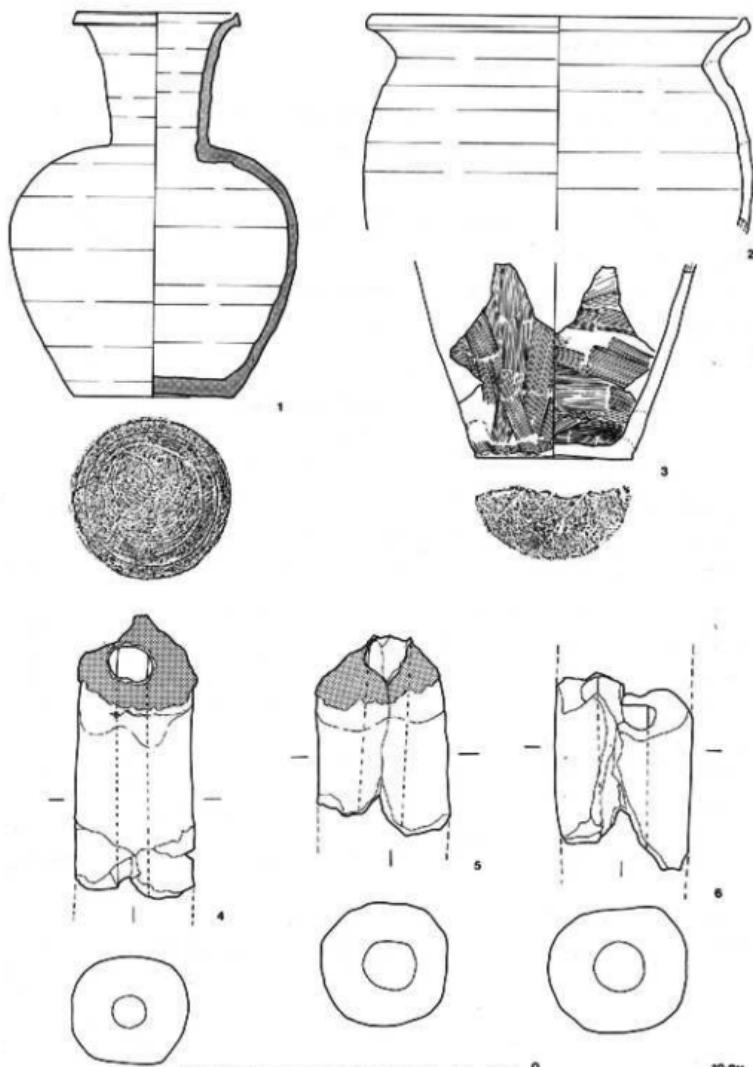
第19図 第33号住居址  
須恵器出土状態 (1/20)

る。規模は長軸1.24m、短軸1.14mを測り、燃焼部は床面を20~30cm程掘り込んで構築されており、補石は1個のみ残している。

本住居址中央のやや西において、鍛冶を行ったと思われる鍛冶炉が検出されている。炉本体はいびつなひょうたん形を呈し、5個の掘り方から成っている。規模は長軸2.04m、短軸0.8mを測り、深さは中央の掘り方で、床面より20cmを測る。又、同掘り方には金床と思われる長さ60cm、幅20cmを測る横円を呈した石が埋設されており、その上端には僅かであるが鉄粉が付着している。炉腹土中にはカーボン粒・焼土粒を多く含み、鐵滓は覆土中全般から出土している。

第7表 第33号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	残存	法身 cm	調 整	耐 熱	耐 熱	備 考
1	須恵器 瓦類	口縁部 1部 を失ひるが ほぼ完形	(8.5) 8.5 30.1	ロクロ横ナギ調整 内面はロクロ窓が切跡 底部は四輪系切りの後、 1部ハラケズリ	白色粒を多量に含む 良	赤褐色 青灰褐色	山腰部から製器にかけて白色の自然釉
2	土師器 甕	口縁部 破片	— — 10.3	ロクロ横ナギ調整	白色粒、砂粒を多量に 含む。 良	赤褐色	
3	土師器 甕	底部 破片	— 8.2 10.3	外縁は擬位のハケ調整 内面は横位のハケ調整	白色粒、黒色粒、雲母 を多量に含む 良	赤褐色	
4	フイゴ 羽口	%	長15.0 幅6.2 孔径1.6	ヘラケズリ	白色粒、赤色粒を含む 良	褐色 1部灰 褐色	先端部に溶解鉄が付着 し、羽口に凝固している。 孔の断面は圓形を呈する。
5	フイゴ 羽口	%	長10.6 幅6.9 孔径2.3	ヘラケズリ	白色粒、赤色粒を含む 良	赤褐色 褐色	先端部に溶解鉄が付着 し、羽口に凝固している。 孔の断面は圓形を呈する。
6	フイゴ 羽口	%	長10.4 幅7.1 孔径2.6 孔径2.6	不 明	白色粒、赤色粒、雲母 を含む 不	赤褐色	孔の断面は円形を呈する。



第20図 第33号住居址出土土器及び羽口 (1 / 3) 0 10 CM

本住居址からの出土遺物(第20図)は少なく、カマド覆土中より土師器壺の破片數片、南壁下の床面直上より須恵器長頸瓶(ほぼ完形)が出土し、鍛冶炉内及びその周辺よりフイゴの羽口3点、鐵滓(楕形滓も含む)が出土しているが、鐵製品・坩堝は検出できなかった。土器類に関しては、日常使用される什器の出土はみられなかった。

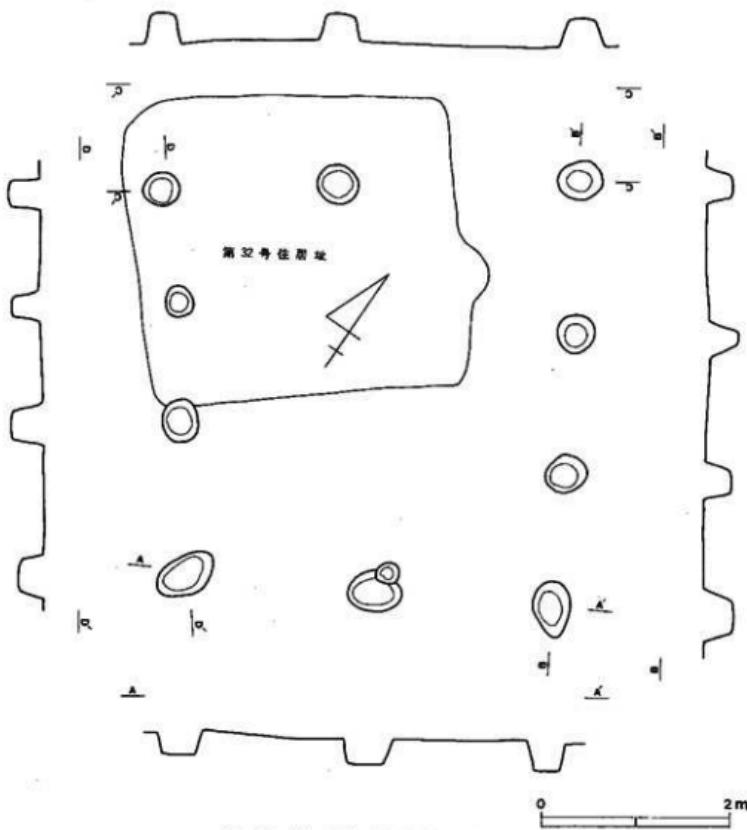
## (2) 挖立柱建物址

### 第11号 挖立柱建物址 (第21図)

本掘立柱建物址はG—7グリッドに位置し、第32号住居址と重複している。新旧関係は本掘立柱建物址が第32号住居址の覆土を掘り込んで構築しているため、本掘立柱建物址の方が新しい。

形態は東西2柱間(3.9~4.4m)×南北3柱間(4.0~4.5m)で、柱間寸法は梁行1.9~2.5m、桁行1.3~1.6mである。

柱穴は梢円形を呈し、規模は径30~60cm、深さ26~34cmを測る。覆土は黒褐色土で、遺物は土師器甕形土器の細片を数片出土したのみである。



第21図 第11号掘立柱建物址 (1 / 60)

## V まとめ

宮間田遺跡は釜無川右岸の低位河岸段丘上に立地し、遺跡の範囲は東西約70m、南北約70mに及んでいる。遺構の検出状態から、さらに東西南北方向に拡がるものと考えられるが、遺跡の東、西、南側はすでに釜無川の氾濫及び基盤整備のために地形は大きく変化しており、遺跡の完全なる様相はもはや知る由もない。遺構は遺跡全体に亘検出されているが、特に遺跡中央部から西側にかけて多く検出されており、遺構どうしの重複もさほど複雑ではない。

堅穴式住居址は35軒検出されている。その内カマドをもつ住居址は全体の16軒であり、第10・15・16・17・18・19・20・24・25・27・29・30・31・32・33・35号住居址である。あとの住居址に関しては、置きカマド等を使用したと思われるものや、遺構どうしの重複により欠失していると思われるものが若干数含まれているが、カマドをもっていない住居址である。カマドをもつ住居址については、その出土遺物から平安時代の所産と判断できるが、カマドをもたない住居址については、出土遺物が極めて少なく時期決定は不可能な状態にある。しかしながら、第9号住居址及び第14号住居址の覆土中より山茶碗、常滑製甕片が出土しており、いずれも13世紀から14世紀の間で捉えられる遺物である。少なくともこの2軒の住居址に関しては中世の堅穴式住居として捉えることができると思われ、他の住居址においても同じくらいの年代を与えることができるかもしれない。

平安時代の住居址は先述のごとく16軒検出されている。平面形は隅丸方形が主体であるが、隅丸長方形もみられる。規模は4~5mクラスのものが中心で、本遺跡中最大の規模を測る第35号住居址で長軸6.0m、短軸5.6mを測る。主柱穴と考えられるピットが存在する住居址は第19号住居址と第35号住居址のみで、それぞれ2本柱穴と4本柱穴である。多くはピットが存在するものの、整然ではなく、主柱穴としては捉え難い。カマドは東壁に位置するものが圧倒的である。第20号住居址・第27号住居址・第30号住居址の3軒のみがそれぞれ南北壁コーナー、西壁、南壁に位置し、出土遺物からこれらの住居址の時期は若干のズレが認められる。構造は石組カマドが主体で、補強材として粘土及び粘質土を使用している。

掘立柱建物址は22棟検出されている。その配置は住居群の中心に位置するように集中し、このような配置形態は高根町東久保遺跡の配置と似ている。建物址の形態は、1間×2間・1間×3間・2間×2間・2間×3間とバラエティーに富み、総柱の建物址も3棟含まれている。総柱建物址の柱穴は径30~50cm、深さ40~60cmを測る。それに比べ総柱ではない建物址の柱穴は径約30cm、深さ約30cmを測り、規模・深さ共に前者の方が上まわっている。こうした構造上の点から、総柱建物址は居住用とみてよいのではなかろうか。又、その他の建物址に関しては、倉庫及び納屋・住居として使用されていたと考えておきたい。

掘立柱建物址に伴う遺物は皆無に等しく、時期判別は難しい状態にある。唯一、第11号掘立柱建物址は、10世紀前半代の所産と思われる第32号住居址と重複関係にあり、同住居址の覆土

を掘り込んで構築されており、10世紀前半以降の所産であることが確認できた。

遺物は土師器の出土が圧倒的で、壺が主体を占めている。壺は外面の斜めヘラケズリ整形、内面の放射状暗文のいわゆる「甲斐型壺」の出土が目立ち、それに伴い須恵器・内面黒色土器・灰釉陶器が伴出している。内面黒色土器は壺よりも高台付皿の出土が目立ち、灰釉陶器は完形品ではなく破片資料のみで、その数も極僅かとなっている。破片資料で観察する限り灰釉陶器は、東濃製が大半を占めているが、第17号住居址カマド内から猿投窯の四耳壺の破片（K-14期に比定される）が出土している。

土師器全般でみると、甲斐編年<sup>（注2）</sup>Ⅷ期（9世紀第四半期）からX期（10世紀第2四半期）に相当するものが主体を占め、とりわけⅨ期に相当するものが多くみうけられる。

墨書き土器は第18号住居址・第19号住居址・第29号住居址・第32号住居址・第35号住居址・遺構外からも出土している。墨書きは壺や皿の体部及び底部に認められ、記されている内容は「神」・「主」・「生」・「田」・「乙」・「Y」等が認められる。又、刻書き土器も出土しており、土師器・須恵器の体部及び底部内外面にベン先状工具で、十字に線刻されたものが多い。

第18号住居址及び第19号住居址より多数の土錐が出土している。土錐は管状形・紡錘形を呈するものがあり、完形品も多いが先端部を欠損しているものも目立つ。長さ3~5cm、孔径3~4mmで、色調は褐色、赤褐色を呈し、胎土は緻密で精造されている。土錐の出土は先の2軒の住居址に限られているが、当時において何らかの形で漁撈に携わっていたわけで、山間部における生業が単に農耕のみでないことを物語っていよう。

最後に鍛冶遺構について若干の問題点を述べておきたい。本遺跡で鍛冶遺構とされるものは第33号住居址であるが、鍛冶炉及び鉄滓、フイゴの羽口等の遺構・遺物が検出されている。鉄滓の総重量は1793gで、椀形を呈する椀形滓數点、多数のくず状鉄滓が鍛冶炉内及びその周辺部から出土している。羽口は3点出土しているが、いずれも欠損品で床面直上からの出土である。羽口の先端部は斜めにカットされ、さらに約30度の角度で熱を受けて外面が変色している。おそらくこの角度をもって炉本体に装着されていたものと思われる。鉄製品は1点も出土していない。又、南壁のやや東よりの壁直下から、須恵器長頸瓶の完形品が出土しており、祭祀的行為に伴う可能性も高い。

近年、北巨摩地域においても鍛冶遺構の発見例が増加しつつあり、その存在意義が大きな問題となっている。北巨摩地域においては少なくとも9世紀末から鍛冶遺構は存在はじめている。本遺跡においても鍛冶遺構は9世紀第4四半期頃から存在していたものと出土遺物から判断できるが、その前後については不明である。鍛冶そのものの問題をみれば本遺跡の場合、小鍛冶と共に大鍛冶も行っていたことは遺構や出土遺物から明らかである。このことは専門集団の存在が充分に推測されるわけで、非農業民であったと思われる彼らと、一般農業民・在地支配者層との関わりがいかなるものであったのか、さらに牧経営にもどのように関与していたのかを考慮する必要があると思われる。平安時代における彼らの存在形態は未だ不明瞭な点が多い。

いが、今後のデータの蓄積及び研究から彼らのより鮮明な姿が浮かび上がってくることに違いはない。

(註1) 関宮正樹「東久保遺跡」高根町教育委員会1984

(註2) 板本美夫・末木 健・堀内 真「シンボジウム奈良・平安時代の諸問題」神奈川考古第14号1983

## 参考文献

- 浅野春樹 「埼玉県内出土の平安末期の施釉陶器」埼玉県立歴史資料館研究紀要2 1980
- 有吉重蔵・西脇俊郎 「武藏国分寺遺跡発掘調査概報V」武藏国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1981
- 井関弘太郎 「弥生時代以降の環境」岩波講座日本考古学2 人間と環境 岩波書店 1985
- 一志茂樹 「官牧考」信濃2—4・5 1950
- 岡田正彦 「平安時代の鉄製用具と小鍛冶遺構小考」中部高地の考古学II 1982
- 小林秀夫 「判ノ木山西遺跡—平安時代の問題—」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その3— 1981
- 斎藤孝正 「猿投窯における灰釉陶の展開」考古学ジャーナル211 1982
- 高橋一夫 「製鉄遺跡と鉄製農具」考古学研究87号 1976  
「集落分析の一視点 一入口と集落の道—」埼玉考古第21号 1983
- 田口昭二 「美濃窯の灰釉陶器と綠釉陶器」考古学ジャーナル211 1982  
「美濃焼」考古学ライブラリー17 ニュー・サイエンス社 1983
- 土井義夫 「鉄製工具研究ノート—古代の整穴住居址出土資料を中心に—」どるめん10号 1981
- 長沢宏昌他 「北堀遺跡」山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 山梨県教育委員会・日本道路公団 1985
- 橋崎彰一・斎藤孝正 「猿投窯編年の再検討について」愛知県陶磁資料館研究紀要2 1983
- 橋口定志 「平安期における小規模遺跡出現の意義—南関東における事例を中心にして—」物質文化44 1985
- 服部敬史 「南武藏における古代末期の土器様相」東京考古第1号 1982
- 丸山日出夫他 「船室社遺跡—鉄製品—」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市その4— 1980
- 山梨郷土研究会編 「山梨郷土史年表」山梨日日新聞社 1981

図版 1

1. 遺跡遠景

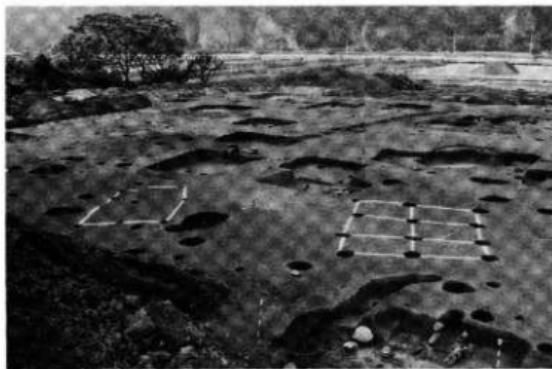


2. 遺跡遠景

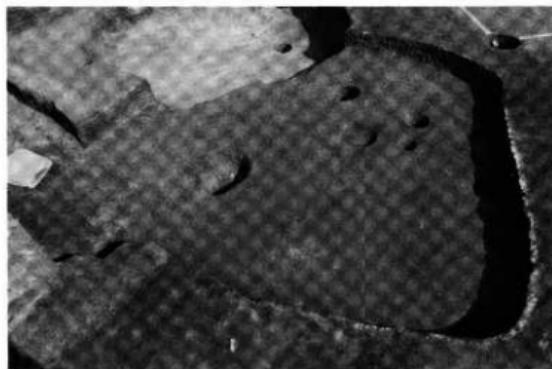


3. 遺跡全景

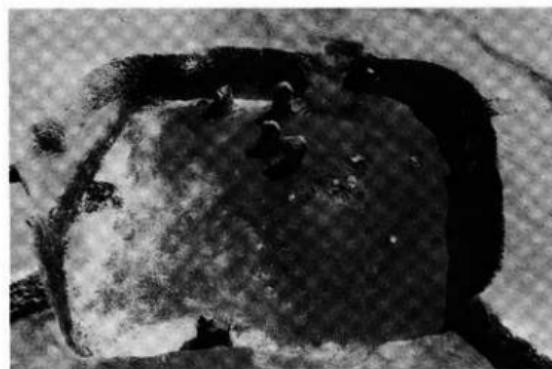




1. 遺跡全景



2. 第9号住居址

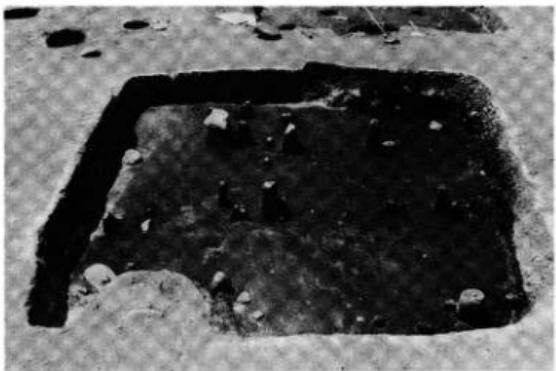


3. 第10号住居址

1. 第14号住居址



2. 第18号住居址



3. 第18号住居址  
土器出土状态

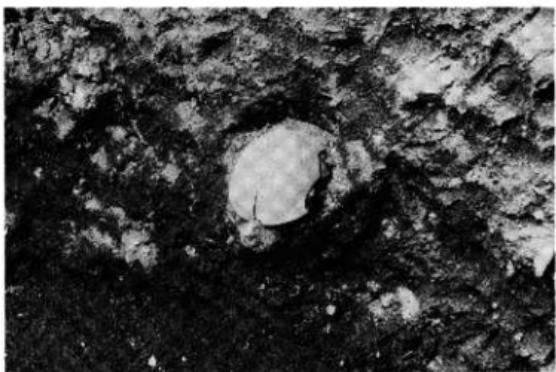
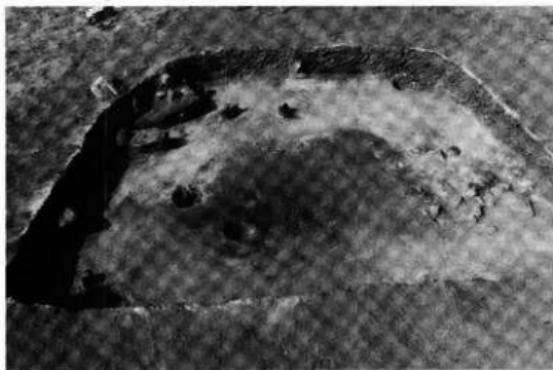


圖 版 4



1. 第18号住居址  
土器出土状態



2. 第20号住居址



3. 第20号住居址  
カマ下

1. 第32号住居址



2. 第33号住居址



3. 第33号住居址  
須志器出土状態



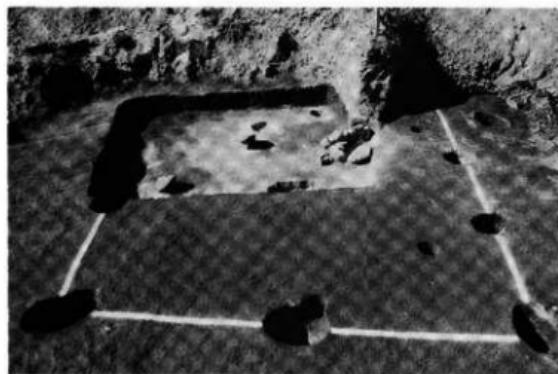
圖 版 6



1. 第33号住居址  
鐵冶爐

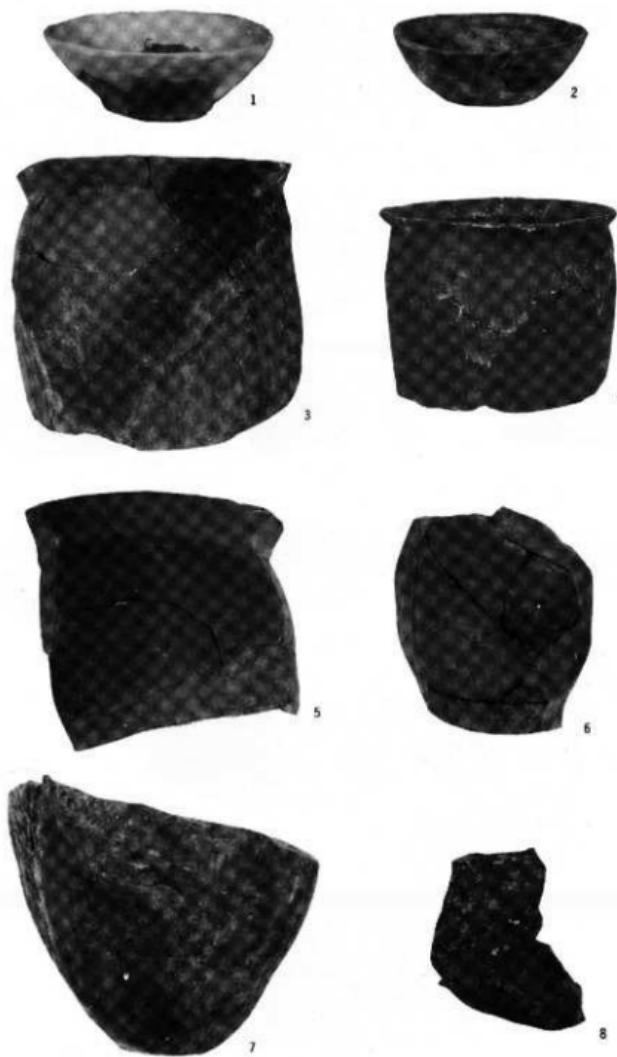


2. 第33号住居址  
鐵冶爐內金床石



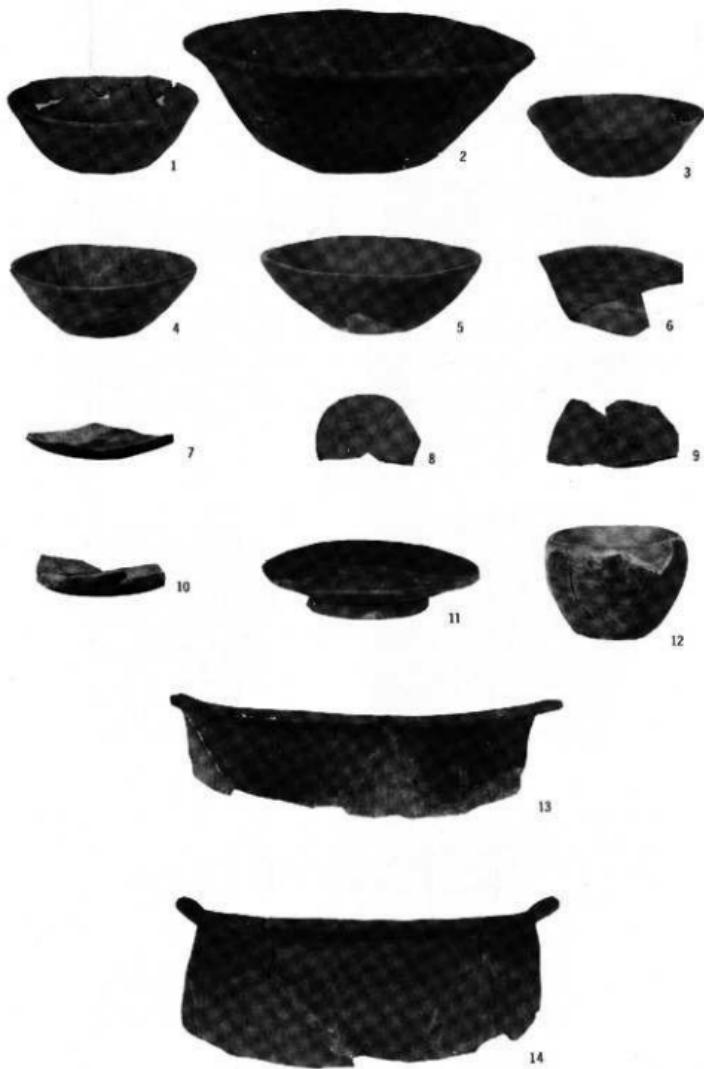
3. 第11号掘立柱  
建物址

図版 7



第9号住居址出土遺物(1)及び第10号住居址出土遺物(2~7)  
第14号住居址出土遺物(8)

圖 版 8



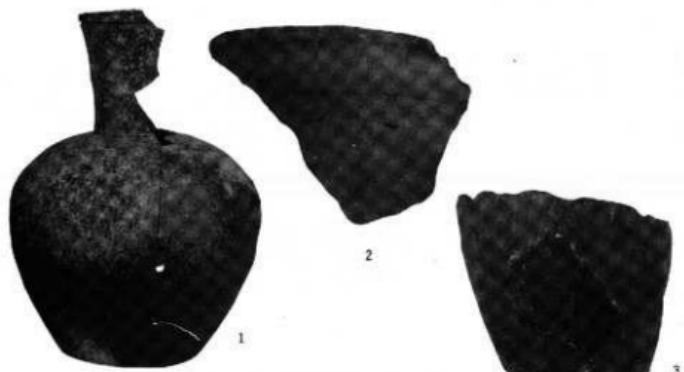
第18号住居址出土造物 (1 ~ 14)

圖 版 9

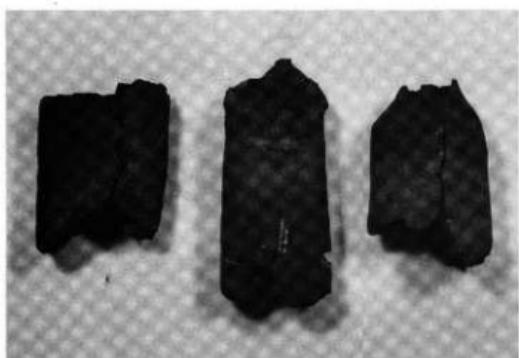


第20号住居址出土遺物(1~4)  
第32号住居址出土遺物(5~14)

圖 版 10

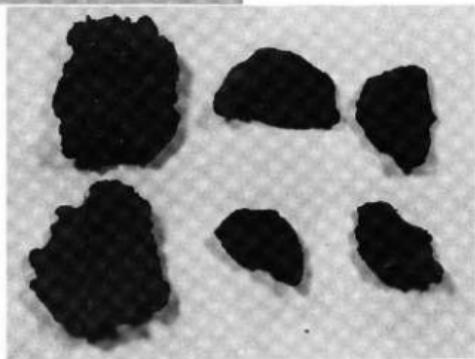


第33号住居址出土遺物(1~3)



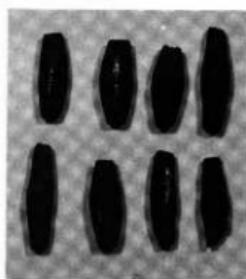
第33号住居址出土 羽口

第33号住居址出土 鐵 淬

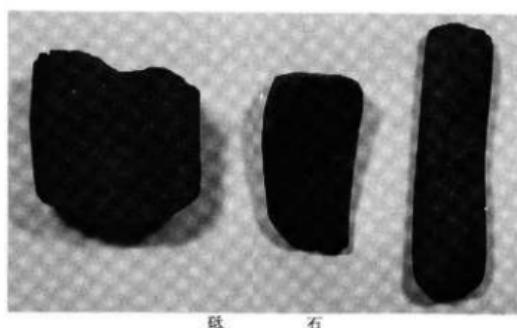




鐵 製 品



第18号住居址出土玉鍊



石 石



縄文時代石鍛

## 宮間田遺跡発掘調査概報

昭和61年3月25日印刷

昭和61年3月31日発行

編集・発行 武川村教育委員会  
山梨県北巨摩郡武川村二吹1261-1  
TEL 0551-26-3021

印刷 別北印刷株式会社  
山梨県北巨摩郡長坂町長坂2313  
TEL 0551-32-3245

